



石岡みさき(著)

## 『ジェネラリストのための 眼科診療ハンドブック』

[評者] 八戸市立市民病院 救命救急センター・臨床研修センター所長 今 明秀

つや消しの白い表紙に空色のタイトル。なんと清潔なんだろう。書き手によって本の顔は変わる。上品な色使いに、多くの医療者は平積みになった新刊の群れから、きっとこの本を手に取りたくなるだろう。そして、ページをめくると、優しい文体に気づく。「〇〇してください」と、それでは、内容を紹介しよう。

瞬間接着剤を点眼してしまったらどうするか？ その答えは、「睫毛を切る」。読んで笑ってしまった。まるで、4コマ漫画に出てきそうな場面である(p.21)。

霰粒腫<sup>さんりゅうしゅ</sup>を結膜から切開したあとに、出血が止まらなくなった時はどうするか？ よく考えればわかるかもしれないが、縫合止血ではない。答えは、ガーゼを持った掌で切開した部分を圧迫し、ロダンの「考える人」のように大腿に肘をついてもらい頭の重みで数分間圧迫すること(p.23)。

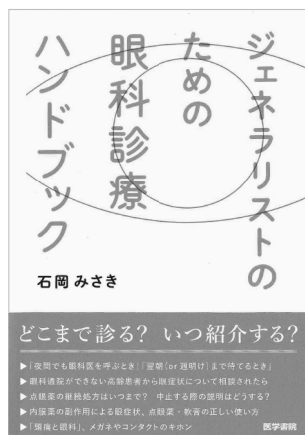
日中に溶接かスキーやスノボを行い激痛で夜中に受診する電気性眼炎では、診察時にペノキシル<sup>®</sup>点眼麻酔薬を使う。これは20分ほどで切れるので、前もって説明しないと再受診になる。頻回のペノキシル<sup>®</sup>点眼は角膜障害を起こすので、処方してはいけない薬だそう。もし、患者がペノキシル<sup>®</sup>点眼常習者なら、それは自傷行為でありMünchausen症候群だと(p.43)。

義眼というのは、『ゲゲゲの鬼太郎』のお父さん(目玉おやじ)のように球形だと私は思っていた。それは間違いで、カーブした円盤状の物(p.77)。

関東の花粉症(アレルギー結膜炎)は、バレンタインデーから花粉が飛び始めるので、その2週間前の1月末から治療を開始する(p.80)。女性がチョコの心配を始めたら、点眼薬もスタート。花粉症では、洗眼も効果的。水道水では塩素が眼の表面に傷をつくるので、人工涙液が望ましい。人工涙液とは、生理食塩水のこと。人工涙液の使用上の注意に、「緑内障の診断を受けた人は医師にご相談ください」とあるが、その必要はないと明快。

温めるか冷やすかのよくある質問。ドライアイは温める。アレルギーは冷やす(p.83)。そうなんだ。

点眼薬に小児用量はない。小児用点眼薬として



「しみる」点眼薬はワサビ

売られているのは、「しめない」だけで薬効は同じ。成人用市販の「しみる」点眼薬は、あえてメントールを入れた(p.122)。ワサビを子どもは嫌いだ、大人は好き。これと同じだ。

これだけ読んで、相当役立つ内容のはず。もしかして、すでにラインマーカーで印をつけていますか？

著者紹介を読んだ。石岡みさき先生の座右の銘は「反省しても後悔はしない」だそう。最近、中高生を対象に、心に響いた言葉のコンテストが行われた。松岡修造さんの言葉が、有名人のなかでは断トツ1位の引用だった。なかでも「反省はしろ！ 後悔はするな！」が支持されていた。石岡先生に尋ねてみた。「松岡さんの影響ですか？」「いいえ、独自に思うようになりました」。松岡さんと同じことを言っている石岡先生だが、松岡さんとは違う空気を感じる。それを、この本を読んで感じてほしい。3,400円也(税抜)。

● A5 / 頁 198 / 2015 年 / 定価：本体 3,400 円 + 税  
[ISBN978-4-260-02418-1] 医学書院 刊